

## 佚山黙隠の書画篆刻について—新出作品からみた中国文人文化受容—

石沢 俊（神戸市立博物館）

佚山黙隠（1702～78）は18世紀に活躍した大坂出身の曹洞宗の僧で、書画篆刻に優れた。俗名は森本正蔵、字は修来、玄中、元文3年（1738）の出家後は佚山黙隠と称し、常足道人と号した。若くして大坂を代表する唐様書家・新興蒙所（1687～1755）に師事し篆隸諸体を学び、絵画は寛延元年（1748）から3年にわたり長崎へ遊学した折、熊斐（1712～73）に南蘋風花鳥画を学んだ。鶴亭（1722～85）とは同門にあたり、相前後して京坂で南蘋風花鳥画や水墨画を手掛け、合作も遺されていることから二人の交友が想定される。『三都学士評林』（明和5年（1768）刊）、『浪華郷友録』（安永4年（1775）刊）、『平安人物志』（安永4年版）にその名がみえ、佚山は生前から京坂を代表する書家、画家、僧侶であった。彼が手掛けた唐様の書、篆刻、唐画は、伊藤若冲や池大雅など、同時代の京坂で中国の文人文化に憧憬を抱いた画家たちに大きな刺激を与えたと考えられ、近年は若冲や南蘋風花鳥画を取り上げた展覧会で佚山の作品が紹介される機会も増えてきた。佚山の先行研究は三村竹清氏、村上泰昭氏らの論考があるが、とりわけ曹洞宗の僧・千丈実巖（1722～1802）による「佚山道人隠公伝」（『幽谷余韻』後編（文政7年（1824）序）巻三）をはじめ佚山の活動を詳らかにした中野三敏氏の研究は重要である。

本発表では、近年の調査で見出した佚山の作品を紹介し、書画篆刻に活躍した彼の活動をより具体的に提示する。『修来印譜』（享保18年（1733）序、神戸市立博物館）は出家前の佚山（森本正蔵）が刊行した初の印譜で、伝存わずかな稀観本であるが、新たに別本が発見された。本印譜は3冊本で第1・2冊「唐人印章」は李白、杜甫など唐代の詩人120名に由来する印章を、第3冊「私印」は佚山や弟子の多賀晚成、小田燕山らの名・字・号などの印章46顆を原鈐し、佚山の篆刻の最初期作として重要である。「西銘書卷」（元文4年（1739）11月下旬、同館蔵）は佚山が出家した翌年の作で、北宋の儒学者・張載（1020～77）の代表的著作「西銘」全文を真行草篆隸各体で書いている。出家直後は「逸山」と称した可能性を中野氏は指摘されていたが、本作品巻末の落款・印章はそれを証明するものである。「薔薇葉鷄頭小禽図」（宝暦4年（1754）10月、同館蔵）は長崎や西国の遊歴から京坂に戻った年の作で、沈南蘋の筆意に倣ったことが落款と画風から明らかな佚山初期の絵画である。本作品は熊斐「菊に小禽図」（個人蔵）と図様がきわめて近いのだが、熊斐の作品は長崎で熊斐から佚山に贈られたことが表襟の墨書から判明する。熊斐に南蘋風花鳥画を学んだことは先行研究で指摘されてきたが、これら2点の小禽図は熊斐への師事を明らかにしている。以上のとおり、新出作品の検討を通して、佚山の書家・画家・篆刻家としての姿を、ひいては江戸時代中期の京坂における中国文人文化の受容の一様相を明らかとしたい。